

- 中間まとめ資料 -

これからの市民参加型まちづくりのための
オンラインを活用した対話の場づくりモデル構築プロジェクト



H-UTokyo Lab.

MIMICr7
DESIGN

1.本研究の概要と目的

2.基本情報/リサーチ情報の整理

2-1. 「ワークショップ」「対話」とは

2-2. まちづくりにおける「市民対話」について

2-3. 市民対話における「オンライン」活用の可能性について

3.市民参加型まちづくりのための「オンラインを活用した対話の場づくり」について

3-1.本プロジェクト(PJ)で目指すまちづくりの対話モデル

3-2. オンラインを活用した対話の場づくりプロセス概念図

1.本研究の概要と目的

本プロジェクトの目的は新型コロナウイルスの流行を経た、これからの時代における市民参加型まちづくりに向け、**オンライン対話ツールを活用した「新たな対話モデル」**を構築することです。

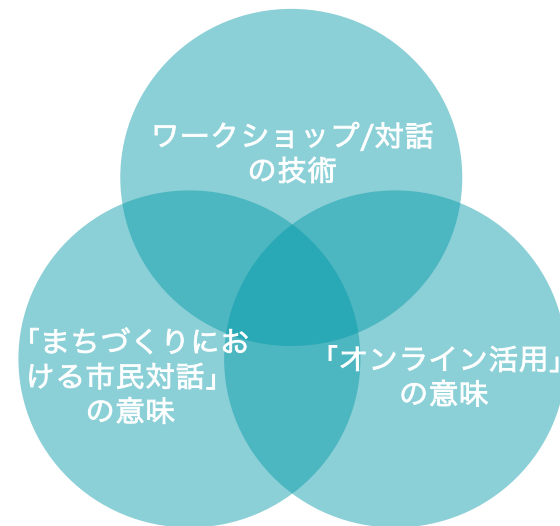
そのために、「市民対話型まちづくり」を支えるものとして主に以下3つの視点について実践事例や概念の整理・統合を試みました。

- ①「対話・ワークショップ」の知見
- ②「まちづくりにおける市民対話」の知見
- ③「オンラインツール」の活用事例と可能性の整理

そこから構築した「新たな対話モデル仮説」を基に実際のプロジェクトで実施検証を行い、理論と実践が融合した強固なモデルへのアップデートを今後の展望としています。

なお、まちづくりと一言に言っても、様々な実践者が様々な地域で活動を行っていますが、今回のプロジェクトでは、次の3領域を対象として考えを進めています。

- 行政によるハードづくり
- 官民一体で行う地域のビジョンづくり
- 主に市民によるまちづくり活動



2-1-1. 「ワークショップ」とは

今回の対話モデルの実施場となるワークショップ(WS)とは、4つのエッセンスを大切にしながら「普段とは異なるもの見方から発想するコラボレーションによる学びと創造の方法」と定義し、ワークショップを実施する上で不可欠なファシリテーターという役割は「一人ひとりの創造的衝動を起点として創造的な対話を促進する」とことと定義しています。

ワークショップのエッセンス

非日常性

いつもとちょっと違うやり方で遊びごころをもって取り組む

協同性

参加者同士のコミュニケーションから生まれる意味や発見を重視

民主性

関係者/参加者の意見を大事にするトップダウン→ボトムアップ

実験性

参試しにやってみるという姿勢“答え”や“設計図”がない

ワークショップの基本構造

1.導入

2.知る活動

3.創る活動

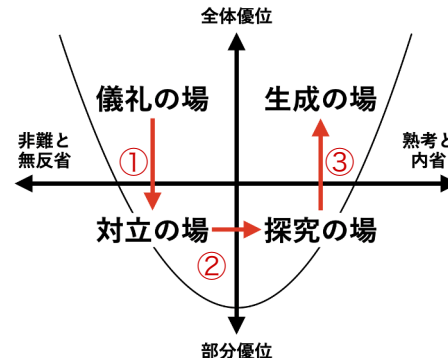
4.まとめ

2-1-2. 「対話」とは

対話には4つのフェーズがあり、適切な段階を踏んで「創造的な対話」に移行する必要があります。そんな「対話フェーズの移行」を支えるファシリテーションのポイントは以下の3点です。

- ①儀礼の場→対立の場：互いに本音を場に出せるようにする。
- ②対立の場→探究の場：全員の合意を急がず、意見の違いの前提にある「価値観の違い」を探究し合えるようにする。
- ③探究の場→生成の場：「価値観の違い」を活かし、「創造的なアイデア(=第3の案)」を生成する。また、それが継続的に行えるような関係性を構築する。

ダイアログにおける4つの場



2-2. まちづくりにおける「市民対話」について

まちづくりにおける”市民対話”の意味や目的は多岐に渡り、企画メンバーの中で共通認識もないまま実施されているケースも少なくありません。

本プロジェクトでは、まちづくりに関する先行研究や実践者が感じている近年の”市民対話への期待値”を基に本質観取を行った結果、「既存の土壌（文脈や関係性など）を尊重しながら、まちの課題解決や魅力創出をしつつ、中長期的に創造的な土壌を創っていくための、市民の潜在的な創造的自治力を涵養すること」と定義しました。

そんな「市民対話」は、まちづくりにおいて具体的に以下4つの機能を持っています。

- ・ **関係構築** … それまではなかった関係性を作る
- ・ **理念浸透** … 現状のまちづくりのビジョンを共有する
- ・ **合意形成** … 施策の方針を合意形成する
- ・ **創造的対話** … 仲間としてコンセプトやアイデアを共創する

2-3. 市民対話における「オンライン」活用の可能性について

オンラインを活用することで、市民対話の場に3つの新たな可能性を拓くことができます。

①参加者の開放性

時間と場所の制約が和らぐことで、参加対象者を今現在その地域にいる住民だけでなく、仕事などの都合で参加が叶わなかった方の参加や、潜在市民を含め遠隔から数百人規模の参加も可能となります。

②参加方法の多様性

対話への参加、チャットだけの参加、視聴だけの参加、同期・非同期といった、正統的周辺参加の幅が広がることで参加姿勢の濃淡を参加者自身が選択することができます。そうすることでこれまでは見えてこなかった“小さな声”を拾い上げることも期待できます。

③プロセスの透明性

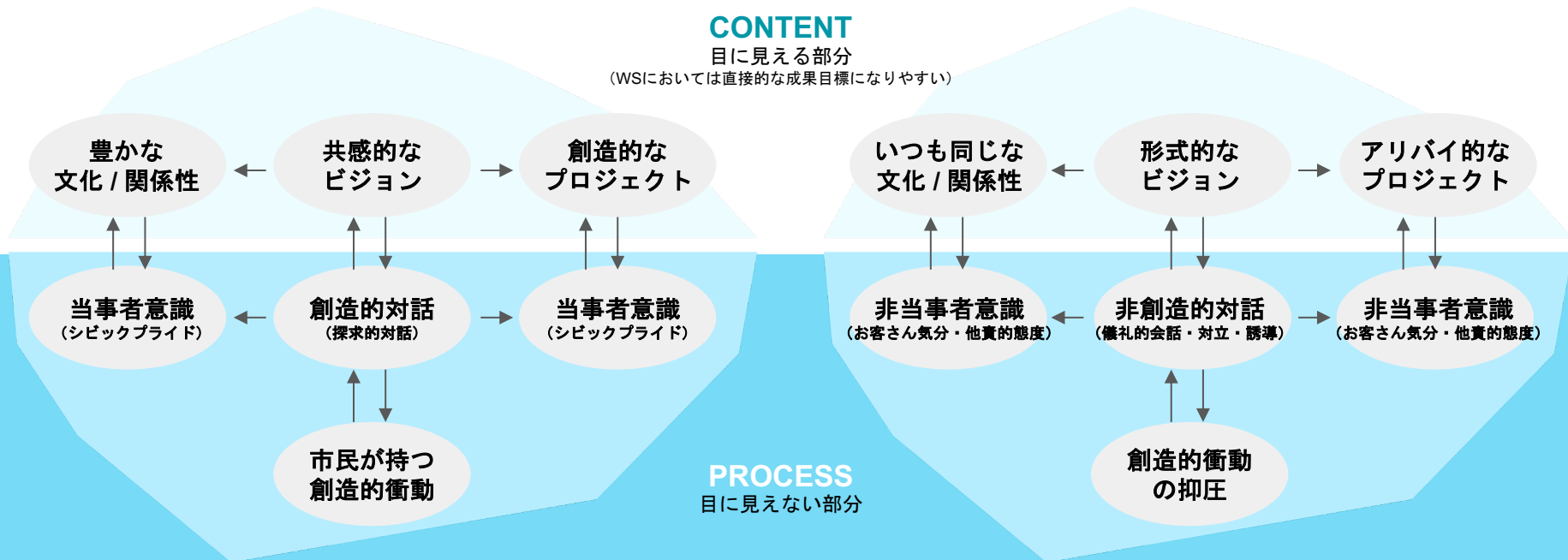
記録が容易かつリアルタイムに公開できることから、参加者以外にも広く継続的に情報公開することが可能です。広く情報公開することは議論のプロセスに透明性と公正性をもたらし、まちづくりプロジェクトへの信頼感を高め、ひいては参加者の増加と連帯を可能とします。

3-1. 本PJで目指すまちづくりの対話モデル

創造的対話（市民の共創関係、市民対話の場）が
心臓として機能している“創造的なまち”の状態

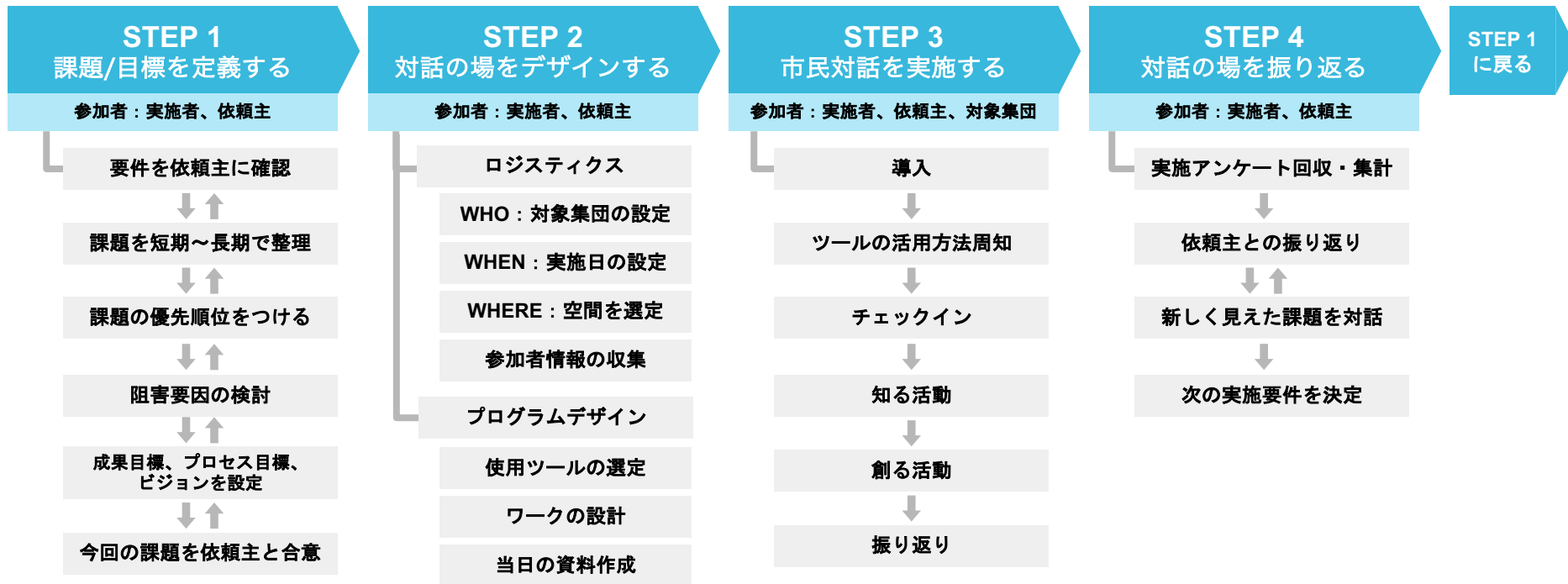
まちづくりにおいて陥りがちな対話モデル

名目のために集められた参加者が抑圧された気持ちの
まま、消費者意識のもとアイデアを出している状態



3-2. オンラインを活用した対話の場づくりプロセス概念図

新たな市民対話モデルが構築されたと言っても、ただやみくもにモデルを扱えば上手くいくというわけではありません。まちづくりをどのようにファシリテーションすべきか、そのプロセスについても整理しました。



3-2. オンラインを活用した対話の場づくりプロセス概念図

まちづくりにおけるオンラインを活用した対話の場づくりは、「ワークショップ」の基本的な企画・実施プロセスが応用できる。その上で「まちづくりにおける市民対話だからこそ」「オンラインを活用するからこそ」気をつけるべきポイントに印をつけた。

